

# 性空上人攷覚書

——書写山と帰依渴仰の人々——

林 雅 彦

一

平安時代中期の法華經持經者・性空上人（九一〇—一〇〇七）は諸国巡遊の後に播磨国素蓋山（書写山）に入って庵室を結んだ。書写山における上人の生活は、

日夜ニ法花經ヲ讀誦スルニ、初メハ音ニ讀ム、後ニハ訓ニ誦ス。舌ニ付テ早キニ依テ也。然カ訓ニ誦スト云ヘドモ、其レモ吉ク功入テ、人ノ四五枚讀ム程ニ、一部ハ誦シ畢ヌ。

（『今昔物語』卷十二・第三十四「書寫山性空聖人語」）

と、持経者としての毎日だったようである。因みに『今昔物語』を繙いてみると、性空上人に關係あるものとして、右の「書写山性空聖人語」の他、卷十二・第三十六「天王寺別当、道命阿闍梨語」、卷十三・第十九「平願持経者、誦法華経免死語」、卷十七・第十四「依地藏示從鎮西移愛護僧語」の三話があげられるが、いずれの話をも例にとつてもすべて法華経持経者たる上人を問題としている。そうした上人を敬慕して、花山法皇をはじめ後中書王具平親王・慶滋胤胤・源信・和泉式部・遊女宮木等々、「当国・隣国ノ老少・道俗・男女、皆、来□不帰依ズト云フ事无シ、世靡テ貴ブ事无限」く、書写の地を訪れたり、詩歌の類を送つたりしたのである。言ってみれば、書写山には西の叡山ナレキとよぶに相応しい、一種の仏教文化圏が形成されていたようである。

小稿は、性空上人の門を叩いて結縁あるいは帰依した多数の人物の中から、花山院及びその周辺の人々と、具平親王關係の人々、源信を頂点とする叡山横川に關与する人々を中心に取り上げ、当代において異彩を放つ書写山の世界と、それに纏わる上人説話の伝承圏の問題について、その輪廓を多少なりとも説明しようとする試みである。

## 二

先ず『今昔物語』所収の人物についてふれることとする。

卷十二の「天王寺別当、道命阿闍梨語」は、道命が書写山に登って性空に結縁を請うた際の出来事を認しためている。それによれば、書写に登った道命が夜半の僧房で法華経を誦していると、僧房の軒の方から誦経の始終「忍テ泣ク人ノ気色」がする。道命が不審に思つて誦経が終つてから外を眺めてみると、そこに性空が感泣して立っていたという。

『今昔』編者はこの時の道命を、「九オホソ、經ノミニ非ズ、物云フ事ゾ、極テ興有テ可咲ウツカシカリケル」と評している。本

話の冒頭でも道命の法華読誦に関して、「其ノ音微妙ニシテ、聞ク人皆首ヲ仰ケ不貴ズト云フ事无シ」と記し、それに続けて、諸仏神が彼の読誦を感嘆して聴聞した話（典拠は『法華驗記』巻下所伝。同話は『元亨釈書』にも見える）を収めている。また、道命の読誦を五条道祖神が聴聞した話が『宇治拾遺物語』第一話「道命於三和泉式部許三読経五條道祖神聴聞事」や『古事談』第三「道命読経道祖神聴聞事」、「東斎隨筆」好色類などに見られる（室町時代物語『琴腹』も同種の話を載せているが、神は少彦名神となっている）。とまれ、道命が「読経の声よき僧」であり、「物云」の方面でもとりわけ秀でていたことがこれら説話に共通して語られている点を注目しておかねばならない。

さて、道命の史実上の足跡では、幼少にして叡山に登り、大僧正良源に就いて修学、後日天王寺別当となった人物である。ところが、説話集や室町時代物語に一度登場してくる道命はというと、和泉式部と色欲に耽っていたことになっている（『宇治拾遺物語』巻頭話、『雑談集』巻七・三「読経誦咒等時節浄不浄事」、「古今著聞集」巻八・好色第十一「道命阿闍梨歌を以て和泉式部に答ふる事」など）。それがさらに時代を経て荒唐無稽化していった時、所謂御伽草子の『和泉式部』のように、捨て子の道命とその母であり遊女である式部とが母子相姦の罪を犯し、母式部が懺悔の場を求めて性空のもとに尋ねゆく話となって、我々の眼前に登場してきた。しかし一方では、

道命阿闍梨は泉式部（マツル）に落不浄（オツル）の僧也しかとも、法華經を讀誦の功德によりて、往生の素懷を遂。

（元祿刊七卷本『宝物集』巻七）

性空聖人は六萬部轉讀して、現身に六根淨を得、道命法師は讀誦のくどくによりて、往生の素懷をとく。

(九冊本『宝物集』第九)

といった形で、法華持經者たる道命像が伝えられ、その功德が一通りでないことを語っていることを併せ考えてみて、右の式部との色欲を扱った説話も意図するところはもともと女人罪障と法華読誦の功德を説くことにあったものと考えて間違いないであろう。<sup>(注1)</sup>

ところで、『法華驗記』卷下所収の「天王寺別当道命阿闍梨」の記載によれば、この道命説話の伝承には天王寺の住僧たちが大きく与っていたようである。伝承方法が口誦・書承のいずれであるかは詳かでないが、著者鎮源もその点にふれており、おそらく同じような話が同時に横川にもつたえられていたものと推定し得る。しかも、あの和泉式部と性空との「くらきより」の歌徳説話が伝えられる或る過程において、天王寺の説經僧たちが関与していたことを併せ考えるならば、『今昔』の記す道命と性空との結縁が伝えられたのも単なる偶然だと一概に片付けられない気がする。

卷十三・第十九に登場する平願の場合も、典拠を『法華驗記』卷上・第四十「播州平願持經者」に求めた説話であるが、要約すると、平願が性空上人の弟子であったこと、そして性空入寂後は書写山の奥深く籠居して年来法華経を読誦していたことが書き記されている。師性空と同様、平願についても幾つかの奇瑞が伝えられている。即ち、書写山中で大風によって僧房を吹き倒され、その下敷になりながらもひたすら法華経を誦したことによって仏神の化身に

救われた話、あるいは年老いて後、とある広い河原で善根の瑞を祈念したところ、翌日その講筵の場であった河原一面に白い蓮花が咲きほころび、それを眺めた人々をして感泣させた話が、終生励んできた法華読誦の功德譚という形で書きとめられているのである。平願の場合にも、山林修行の持経者ないしは聖としての姿勢が少なからずとりあげられているように感ぜられる。

それではこの平願の話はどのように伝承されたと考えるべきであろうか。『法華験記』の採録態度は、中国の文献をはじめ、『日本靈異記』『日本往生極樂記』などにはなほだ素材を仰ぐとともに、他方ではそのころ横川を中心に伝えられていた説話も収載しており、本書が説話伝承に果した役割というものはきわめて大きいようである。三善為康『拾遺往生伝』でも往生者九十五人のうち少なくとも二十数人の話は『法華験記』に依拠しているが、中巻に収められた平願の話もほとんど『法華験記』のそれと同文同話の關係に近いものとなっている。とまれ、『法華験記』所収の平願の話には、平願主催の講筵の席に列した彼の弟子のことが見えているところから、その伝承に書写山円教寺の住僧たちが深く関与していたであろうと考えられる。そして、著者鎮源が横川の僧であってみれば、また横川で広く伝えられたこともまず間違いない。(註2)

性空上人の弟子だと諸資料に明記された者には、右の平願の他に延昭と高明がいる。なかでも延昭が性空の弟子中で指導者としての位置にいた人物であったことは、性空に関する資料中重要な『書写山円教寺旧記』(全五冊、以下『旧記』と略称する)の第一冊に「延昭記」と題が附されていることから十分に窺われるところである。また、この『旧記』「聖者廟堂木像事色紙文」には、

行事僧延昭、奉戀聖者（引用者注・性空）之尊顏、誂安鎮行者、所奉造立也。（下略）

とあり、これに依拠した『播州書写山縁起』の性空入寂の話にも性空を慕う延昭を、

弟子延昭奉<sub>レ</sub>戀。聖者安鎮におほせて。上人の木像を奉<sub>レ</sub>造。廟堂一字をたて。御廟堂と號す。

と、描いている。あるいは、あらゆる性空上人の伝記・逸話に影響を及ぼしている「一乗妙行悉地菩薩性空上人伝」（『旧記』所収。以下「悉地伝」と略称する）の末尾、性空寂後の記事に、

存生之時、於執行者、擧達延昭、成院宣畢、爰至滅後、非門徒僧、押成官符、以同七年延昭參洛、訴申大殿（道長）、被驚仰云、上人與我二世結契、今有何心、忽削其跡、從大殿成賜官符、延昭如舊所執行也、遺弟相議云、  
記録行狀、于時寛弘七年十月十日矣。

と、性空寂後もちあがった書写山の執行の問題をめぐって藤原道長の力をかりたこと（去る長保二年（一〇〇〇）、性空上人は弥勒寺に隠去、あとを延昭が継いでいる）、さらに延昭を中心に性空の遺弟たちの手でその上人行状を記録したことが記されている。延昭の名前こそ直接に出てこないとはいえ、『性空上人伝記遺続集』（以下『伝記遺続集』と略称する）の「悉地縁起不同可存知事」の中には、門徒たちが花山院より上人の行状記録を請うけた旨

が、また『播州書写山縁起』にも同じく門徒が道長から行状記録を請うけたことが記述されている。従って、延昭が既に性空生前中から多大の信頼を得、また性空亡き後の書写山円教寺における指導者として寺の内外で活躍したであろうことは、もはや述べるまでもなからう。再三繰り返すことではあるが、延昭が「悉地伝」作成の先頭に立った人物であったこと、しかも師性空と結縁した花山院や道長とも交渉を持っていたことは、性空上人の伝記や説話の伝承圏を考察する上であらためて確認しておかねばならない事柄である。

高明については、

沙門高明者、本是播磨國書寫山性空上人之弟子也。後住三太宰府大山寺。三衣一鉢之外更無餘資念佛<sup>一</sup>。

の書き出しで大江匡房『統本朝往生伝』に出てくる。彼は専ら念仏誦経を業としていた。そして、橋を造り六角堂を建立する姿は役行者や行基の行業ときわめて類似している。また法華経を書写して井戸に埋め、温泉にしようと誓う様相は持経者一般の法験力のバターンを踏襲しており、その意味で高明も性空と同様聖のグループに属する一人と見做してさしつかえないだろう。高明に関する話は散見のかぎりでは他書には見えない。

以上、本節で述べてきた人々は皆、様々な奇瑞・奇特譚を有する性空上人と同じ法華経持経者だという共通点を持つ。尤も、道命を除いて、彼らが性空と師弟の関係であってみれば至極当然なことではあるが。

注1 性空上人と和泉式部との結縁説話については拙稿「中世における性空上人説話について」(中世文学・第十七号)で若干

ふれておいた。別の機会にあらためて述べてみたい。

注2 同内容の話は『元亨釈書』巻九・感進一にも見える。

三

花山院の書写山行幸の記事は「書写山上人伝」(『朝野群載』所収。以下「上人伝」と略称する。『群書類従』所収「性空上人伝」と同文同話である)「悉地伝」『法華験記』『今昔物語』など多くの資料に採録されている。

寛和二年(九八六)六月二十二日深更から二十三日早暁にかけてあわただしくとりおこなわれた花山院の退位・出家の一部始終は、実は念入りに仕組まれた陰謀術策によってであった。<sup>(注1)</sup>花山院は癒えない心を抱いて翌七月二十二日、微かに書写山に仙蹕、性空上人に結縁を求めたとも、<sup>(注2)</sup>七月二十七日の深更、徒歩で播磨国守藤原茂利のもとに赴き、二十八日に書写山で性空と結縁し、二十九日には還駕したともいわれている。<sup>(注3)</sup>後者の記事の中に「抑帝皇之御幸於外土、誠希代之事也」と評されているのを見ると、やはり花山院の書写山行幸・性空上人との結縁という事態は、院にとってなみなみならぬ心境からであったと想像される(院が性空との結縁に期待し、縋ろうとする心持が多分にあったからであろう)。やがて書写山円教寺は花山院の御願寺となり、講堂建立後に供養が催された。その間の事情は、寛和二年十一月四日附けの性空の奏状文にも窺われるが、<sup>(注4)</sup>翌永延元年(九八七)五月二十六日には左記のような院宣が下された。



先之、寛和二年、花山法皇、忝托仙駕、仍可爲御願之由、上人奏聞、永延元年五月廿六日、静安阿闍梨奉院宣、爲御願既訖。

(『旧記』延照記・縁起)

そして、十月七日の講堂供養は請僧に実因僧都・厳久律師・院源阿闍梨・安海・清範・珍恵・静照を招き、供養願文を寂空(藤原維成)が作して、きわめて壯嚴のうちにとり行なわれたのである(「悉地伝」、『旧記』延照記)。

再び花山院が性空に結縁したのは、書写山の講堂供養から十余年後の長保四年(一〇〇二)三月六日のことだった。前回行幸の際の従者がわずか十余人だったのに対して、今回のそれは、

其扈從者別當散位平朝臣公誠、遠江介橘朝臣則光、散位□□朝臣公眞、藏人藤原正良、峯爲繼(つた)、瀧口四人也。僧者飯室阿闍梨君、小禪師君、左兵衛入道君、次々僧四口、御厨子所、主殿司、喚繼所之侍人等、雖有給約之制、候者惣八十四人也。

(『旧記』官家書・花山太上法皇御幸當州書寫山事)

という仰々しい一行となり、あの傷心の佛の片鱗すら浮かんではこないのである。この時、上人の行状並びに画像が描かれた。

飯室延源阿闍梨侍御共、以疊紙圖上人形貞從頸上、又有筆生者、錄對謁法皇所交會之言談、歸洛之後、圖繪影像、記縁起遺於本山。

(同右)

さて、やや本筋から離れるが、この上人行状及び画像の作成に関して若干ふれておくこととする。「上人伝」と「悉地伝」はそれぞれ、

花山太上法皇。去寛和二年微行見<sub>ニ</sub>上人<sub>一</sub>結縁畢。爾來十七箇年。長保四年三月六日。重結縁。密命<sub>ニ</sub>仙駕<sub>一</sub>。問<sub>ニ</sub>上人行狀<sub>一</sub>記之。于<sub>レ</sub>時地震。蓋是異相歟。

(「上人伝」)

長保四年、爲重結縁、大上仙院密命仙駕、召問行狀、上人奉答、法皇記之、于時地震、蓋異相歟。

(「悉地伝」)

と淡々と書きとめているにすぎない。ところが、『今昔』卷十二・第三十四話では(『法華驗記』に依拠している)、

形ヲ寫ス程ニ、地震有ケリ。法皇大キニ恐レ給フ。其ノ時ニ、聖人ノ云ク、「此レ、不可<sup>オチケラフヘカ</sup>恐給ズ。此レ、我ガ形ヲ寫セルニ依テ有ル事也。亦、此レヨリ後ニ形ヲ寫シ畢ラム時ニ亦可有シ」ト。既ニ形ヲ寫シ畢ル時ニ、大キニ地震有リ。其ノ時ニ、法皇、地ニ下テ、聖人ヲ禮拜シテ返ラセ給ヒヌ。

の如き附会を生ぜしめ、微に入り細に入る描写をもって、上人の法驗にまで言及している。『古今著聞集』卷十一

「花山院書写上人性空の像を写さしめ給ふ事」に至っては、性空の顔にあざがあったのを絵師（本話には延源は登場しない）が見落していたが、地震の騒ぎに筆を取り落したところ、その墨のついた部分が上人のあざの位置だったので、人々は皆不思議なことと思つた、と書いている。その他、『神皇正統録』上・六十六代一条院條、『元亨釈書』卷十一・感進三「性空」、『東国高僧伝』卷六「書写山性空伝」についてもほとんど『今昔』と同じ内容を伝えていることからみて、平安時代末期以降いよいよ荒唐無稽な説話へと走っていった傾向が認められる。こうした傾向はいつまで遡り得るかという点、『旧記』『新略記』所収「開山性空聖人行状之事」の次のような記事がその説話を示唆しているように思われる。

天皇、上人ノ行狀ヲ御問アテ、令記之給、飯室ノ延源阿闍梨被供奉ケルカ、於牖外以疊紙、上人ノ面像形躰圖之、于時地震、天皇即此ノ謂ヲ上人ニ問給、上人答云、此ノ非人カ影ヲ寫給フ間、地神ノ納受也ト云々。

（傍点引用者）

即ち、性空寂後まもない時点において、書写山内部で上人の史実を潤色したり粉飾したりする風潮が醸し出されていた（『法華驗記』や『今昔』などの荒誕な説話構想を生み出すべき基盤が既に存在していた）ものと見做すのは、いささか唐突の謗りを免れないであろうか。

ともかくも、花山院の再度臨幸が、院周辺の人々の手によって推進された「上人伝」編纂事業や上人影像作製という目的遂行の契機になったことは否めない事実である。<sup>（注5）</sup>

ところで、花山院は源信が主催している横川首楞嚴院の二十五三昧会の根本結縁衆の一員でもあった。<sup>（注6）</sup>『首楞嚴院

廿五三昧結縁過去帳』（「恵心僧都全集」。残欠本である）も源信・貞久・相助・良範の四人とともに花山院の行状を収めている。かくして、花山院は一方で書写山円教寺と、他方で叡山横川と交渉を持っていたことになる。

性空上人の伝記・逸話類の伝承過程をさぐっていく必要上、以下花山院周辺の人々と性空との関係について、若干ふれておくこととする。<sup>(注7)</sup>

さて、花山院のところで既に述べておいたように、延源は院の再度の書写山行幸に従い、性空の影像を写しとった人物である。<sup>(注8)</sup> 叡山飯室の阿闍梨とよばれ、天元三年（九八〇）九月三日の叡山中堂供養には右方讚衆（この時性空は右方梵音衆として参列していた）としての役を果たしている（『叡岳要記』上）。従って、性空に関する逸話を叡山に伝え得る位置にあった人に見做してさしつかえなからう。

書写山を御願寺とする旨の院宣に関わった静安は、叡山の住僧として、先の叡山中堂供養の左方読衆（讚衆）にもその名が見える。

寂空（藤原惟成）は前述の如く書写山の講堂供養に際してその願文を作っている（『旧記』延照記）。これより遡って花山院が叡山で受戒した時には、寂真（藤原義懐、院母後の弟）とともに同じく受戒した（『百鍊抄』四）。それというのも、かつて彼が寂真とともに、院の在位中政権を掌握し、院から篤い信頼を得ていたからであって、院が出家すると、即刻近臣たる彼らも出家したといわれている。<sup>(注9)</sup>

書写山講堂供養の請僧に厳久・実因・院源・安海などがいる。

厳久は叡山に止住した僧であるが、花山院との関係が著しく濃厚で、院の出家にあたっては剃髪の役をつとめ（『古事談』第一）、院の崩御後四十九日の法会においても導師となり（『権記』寛弘五年三月二十二日條）、また、書写

山講堂供養の際には読師の役をつとめあげている（『旧記』延照記）。性空との個人的な結びつきも強く、大江為基・源信・慶滋保胤ら道俗数名が同道参詣し、性空の徳行を讃える詩を贈った時、彼も「讚上人詩」を賦して贈った（『伝記遺続集』）。しかるに一方では、源信の弟子でもあった（『僧官補任』）。なお、厳久について、『今昔』卷十三・第四十三「女子死受蛇身聞説法花得脱語」は執心のために蛇身を受けた女が、厳久の法華八講を聴聞して往生するという話を載せ、卷十九・第二十三「般若寺覚縁律師弟子僧、信師遺言語」は当代の名僧の一人に彼の名をあげ、『続古事談』四では、彼が河原院五時講の講師をつとめた旨の話を伝えている。いずれの説話も厳久が説経の道にすぐれていたことを語っている。

実因僧都は幼少にして叡山に登り、西塔の弘延の弟子となったが、毎日法華読誦にいそしみ、説法及びその美声は清らかで、聴聞の人々を感涙させたという（『法華験記』卷中・第四十三、『三外往生記』）。他に彼にまつわる話としては、説経に関する話とたのしい強力談とが伝えられている。前者に、『今昔』卷十四・第三十九「源信内供、於横川供養涅槃経語」、『古事談』第三「了延與実因法談事」（同文同話が『宇治拾遺物語』六十八「了延に実因自湖水中」法文（の事）」にある）があり、後者に『今昔』卷二十三・第十九「比叡山実因僧都強力語」がある。

院源阿闍梨は良源に入室、覚慶の弟子となり、後に第二十六代天台座主となった（『天台座主記』）。『今昔』によれば、源信とともに説経して源満仲を出家せしめたということからみて（卷十九・第四「攝津守源満仲、出家語」）、院源もまた源信との結びつきが強かった一人である。<sup>(注10)</sup>

次に、安海と性空との関係は、先の書写山供養の記事に登場する以外に、『伝記遺続集』に、

天台碩德惠心、安海等登山之時、上人致饗應、而飯有麗妙女人配膳、上人惠心供美飯、安海備餽飯、禮儀雲泥、安海有不快思、還歸之時、女人配膳不平等供、不可爾由被語申畢、惠心告安海曰、彼非凡女、持經法師十羅刹女給仕、今日皁諦女番也、飯有饒妙、依位淺深、上人供甘呂、我與餘殘、汝備世飯、是故不同、其時安海慙愧事。

(「上人德行奇特事」)

といった、安海が源信らと同道して性空のもとを訪れ、饗應をうけた時の逸話が残っている。右の話を含めた五つの奇特譚が「上人德行奇特事」というタイトルのもとで一つに纏められていることを考えてみると、本話も性空の德行奇特の一端を強く主張しようとしていることはいまさらいうまでもない。散見の限りでは他にこの種の類話は現存していないようである。しかしながら、本話の文末に、「此等五德粗見諸家日記、大概抄注之」とあり、本書が成立したと思われる鎌倉時代よりも以前から広く書承されていた説話であったことは明白である。

安海と源信との関係については、『元亨釈書』五・慧解四「釈安海」に、当時天台宗の両輪と称讃された源信・覚運に対してそれぞれ浅広・深狭の修学者であると常に嘲笑していたと書かれている。この記述は頭教の名人であった(『二中歴』名人歴)安海の人柄をしのばせている。彼は早く天台教学に通じ、横川に常住していたという(『本朝高僧伝』卷十一「江州睿山沙門安海伝」)。一条天皇の御代は「時之得人也、於斯爲盛」で、天下之一物を輩出したのであるが、彼もまた源信や覚運・実因らとならび称された学徳の僧の一人に加えられているのである。(『続本朝往生伝』一条天皇の項)。『先徳明匠記』(大日本史料、寛仁元年六月十日條に所引)は安海が源信の弟子でもあつ

たと伝えていゝる。このように、安海は性空と関係を有する一方で、源信ともきわめて強い結びつきを持っていたことが知られる。

以上、右に掲げてきた事柄をもう一度整理して纏めてみるならば、性空上人に関する伝記・逸話中に登場してくる人々は、一方で性空上人と関わりを有するとともに、他方では花山院と深く結びつき、さらに叡山横川の源信僧都ともつながりを有していた。即ち、諸々の資料を通して、そこにきわめて多彩で広い仏教文化圏の存在を眺めることができる。従って、さまざまな性空上人の話は単に書写山内部において伝えられただけにとどまらず、遙かに横川や京師にまで流传されたものと想定されるのである。

注1 『日本紀略』寛和二年六月二十三日條、『大鏡』花山天皇條、『古事談』第一「花山天皇御出家事」「花山天皇御出家御発心事」等々、藤原兼家一族の陰謀とみている。これに対して、『栄花物語』では花山院が亡き悋子を思い、道心がつとって出家したとある。

注2 『旧記』延照記及び「悉地伝」。

注3 『旧記』官家書・「花山太上法皇御幸当州書写山事」。

注4 『旧記』延照記・「講堂供養願文」参照。御願寺の院宣については『播州書写山縁起』『京都御所東山御文庫記録』『峯相記』もふれている。

注5 前掲資料の他、『帝王編年記』『扶桑略記』にも花山院が性空上人に結縁を求める記事がみえる。あらためて院の上人に対する執心のほどが窺われる。なお、『後拾遺集』巻九に花山院の詠まれた、

書写のひじりにあひに播磨園におはしまして明石といふところの月を御覧して  
月影は旅の空とてかはらねどなをみやこのみこひしきやなぞ

が収載されている。

注6 『二十五三昧根本結縁衆過去帳』（恵心僧都全集）に「花山禅定法皇」と記されている。

注7 花山院及びその周辺の人々と性空との交渉については、既に高橋貫氏が若干ふれておられる（「恵心僧都関係の説話について」国文学研究・第二十六集）。

注8 『旧記』官家書及び新略記、『法華験記』『今昔』『神皇正統録』上など。

注9 『大鏡』花山天皇條、『古事談』第一、『古今著聞集』卷十三。

注10 院源が説経の方面で他に抜きんでていたことは、『二中歴』の説経項や『続本朝往生伝』の一条天皇項等々に記されている。

#### 四

性空上人の弟子及び花山院周辺（叡山横川の関係者でもある）の人物と性空との関係については上に見てきた通りである。上記以外の貴紳・官人たちは性空とどのような形で関わりを有したのか、以下主だった人物に限定してふれることにしたい。

初めに当代随一の貴紳・藤原道長の名前をあげねばならないであろう。「悉地伝」及び『播州書写山縁起』は表現を異にしながらも、それぞれ「上人與我二世結契」、「花山の法皇、おなしく御堂の關白道長公、上人と御契り浅からず」と、性空と道長との浅からぬ関係を示唆している。また、寛弘七年十月、仙洞の文車に収められた上人行状（「悉地伝」をさす）を、延昭ら性空の遺弟たちに下賜する際、彼がそれに関与したことを述べた話も存する。<sup>(注1)</sup>これとは別に、当時左大臣であった道長が性空の告示に従って、仁王経千部の供養を行なった記事が『御堂関白記』寛弘二年四月三十日、五月四日の両條に見えていて、ここでも性空との結縁の一通りでなかったことを領かしめてくれる。かくして性空が道長より尊信をうけていたことが知られる。なお、道長と花山院との交渉については既に周知の



通りである。<sup>(注2)</sup>

藤原公任もまた性空と因縁の深い人物であった。息子定頼との「式部赤染勝劣論」(『俊頼髓腦』、長明『無名抄』などに所収)において、公任は、当時世間一般に秀歌と考えられていた例の和泉式部の「くらきより」の歌よりも、同じ彼女の「こやとも人を」の歌の方を代表歌と見做すべきだという評を与えたことになっている。この公任父子の勝劣論は『拾遺和歌集』以後に成立したと思われるので、既に公任は同集に収められた式部の「くらきより」の成立事情を十分知っていたであろうと推定される。<sup>(注3)</sup> その公任が実は寛弘二年五月三日、書写山に登っている。

今日左衛門督向播磨性空聖許云々、件聖住播磨国書寫山。

(『小右記』)

翌る四日、道長邸では性空の告げになる仁王経千部の供養(前述)がとり行なわれている。これと、公任の書写登山という事情がはたして直ちに結びつく出来事であったか否かは今日では詳かには出来ない。<sup>(注4)</sup> が、いずれにせよ、公任の書写山参詣といい、道長邸での供養といい、それらは当代都人士たちの性空に対する帰依や渴仰がどれほど篤いものであったかを如実に物語っているようである。

次に、後中書王具平親王の性空上人への傾倒ぶりを忘れてはならない。一説に「上人伝」は具平親王作と伝えられているが、その真偽は暫く措くこととして、親王が「上人伝」の編纂に深く関与していたことは資料によって十二分に裏付けられるところである。例えば、『旧記』官家書には、

華山法帝光臨之次、寫取上人起居形骸令墨書、采女正巨勢廣貴、圖繪上人德行異態、中務卿諱具平親王御製、令參議正四位下行右大辨藤原行成卿書之。(下略)

とあり、『播州書写山縁起』の中にも、

法皇通寶山に一日御とうりうありて、上人の行狀をしるし、又形貌をうつさせ給ひて、都にて繪所の采女の正廣(つとむ)其圖畫し、中務親王色紙の記を草し給ひ、參議右大辨藤原行成卿書し給ひ、當山に送り給はりて、今に靈寶たりと、ほとんど同内容の話が書きとどめられている。即ち、花山院の命令に基づき、巨勢広貴画くところの性空影像に、具平親王が贊を附し、藤原行成がそれを清書したのである。時に長保四年(一〇〇二)八月十八日、花山院の書写山再度の行幸より五ヶ月後のことだ(注5)。それより遡って永延二年(九八八)のとある日、大江為基・源信・嚴久・保胤ら道俗相交わりて書写山を参詣した折、各々性空上人の聖徳を称讚する詩賦を作製しているが(『伝記遺続集』「上人淨六根拜所依地事」、後日、彼らの詩に和して具平親王も上人を讚える詩序並びに詩を賦した(『本朝塵藻』巻下・仏事部、『天台叢標』二編卷之三)。その詩序は左記の如きものである。(注6)

近來播州書寫山中。有性空上人者。誦法華經爲事。寤寐不休。天台源公聞其高行。遠尋相見。緇素結緣者。寔繁而有徒。予傳見諸讚聖德詩。願身恨障礙多緣。未遂頂禮。令綴拙什。聊結緣。

そこには、親王自身常日頃かなたより尊信してやまない性空に、保胤や源信らが結縁したことを羨ましがる心境が窺われる。さらに詩そのものにも「再<sub>三</sub>拜西方<sub>二</sub>遙寄<sub>レ</sub>語。慧光早照<sub>レ</sub>我愚癡。」とあって、親王の仏道に對するひたむきな信仰の心と、天台に連なる持経聖・性空への限り無い願望とが滲み出ているのである。その他、前掲『播州書写山縁起』も「親王いまた上人に御對面あらぬ事を恨て、色紙の記にそへて送り給ふ」と、右の詩序と類似した構想に続けて、詩の全文を引いている。『峯相記』においても、運歩詩や歌を詠み贈って性空上人と結縁あるいは師弟の關係を持った人として、源信・覺運・慶滋保胤・大江定基・和泉式部らとともに親王の名を書き留めている。

ところで、具平親王やその師保胤たちが和歌・詩文や経学等の文化的方面で活躍した一条天皇の御代は、まさにあらゆる分野にかつてない才人を輩出した時代であった（『統本朝往生伝』「一条天皇」など）。かくて学芸の方面に秀でた親王の周辺には、俗に「正曆の四家」とよばれる慶滋保胤・大江匡衡・紀齊名・大江以言をはじめ、源順・橘正通・源為憲・藤原為時・藤原惟成・菅原資忠・藤原齊信・藤原公任・藤原行成等々の、当代の学者・文人仲間が何候・交遊して、何時しか親王を核とする文壇が形成されていったようである。また、親王の千種殿（在<sub>レ</sub>7）に列して詩文の作を競い合った彼らの多くは、そのかたわら性空と深い縁（縁（縁））を持っていたり、当代仏教思想の中心的人物であった横川・源信僧都の影響を多大に享けたり、あるいは花山院のもとに伺候したりしている。従って、出離の生活の中に自由を求めた親王であってみれば、「緇素結縁者。寔繁而有<sub>レ</sub>徒」った性空の聖徳奇特を方々から伝え聞いたとき、自らも性空と「聊結縁」せんことを願う気持がいよいよ募っていったものと思われる。

後年出家して内記入道とか寂心とか呼ばれた慶滋保胤は、具平親王にとって詩文の師であり、仏道における先覚で

もあつた。だからこそ、保胤を失つた時の親王の悲歎は言葉に尽せないものだったようである。「贈心公古調詩」はその冒頭から「少日受君業。長年識君恩。不嫌我才拙。頻垂師訓悖。」と、師保胤の死を痛む思いを綿々と訴え、「願共生極樂」。(分注略)願共謁慈尊。」と書き綴っている。それは扱置き、保胤の文化面における活躍は誠に見張るものがあり、康保元年(九六四)三月、文人や天台衆僧とともに勸学会を起こし、朝に法華経を講じ、夕に弥陀念仏を唱えて、詩を作つた。寛和元年(九八五)から永延二年(九八八)に至る間、後世の説話集編纂に大きな影響を与えた日本初の往生伝・『日本往生極樂記』を認め、寛和二年(九八六)九月には、源信とともに主催した二十五三昧会の起請文を草した(『高山寺文書』・大日本史料・寛仁元年六月十日條所引、『横川首楞嚴院二十五三昧起請』)。これより遡つて寛和元年、出家と同時に横川に登り、その頃飯室に居た僧賀上人に止観を学び(『発心集』第二「内記入道寂心事」、『私聚百因縁集』卷八・三「僧賀上人事」)、源信に浄業を学んだ。また、道長との連関も深く、保胤の晩年には道長の授戒の師をつとめている(『発心集』第二)。

さて、肝腎の性空との結縁は、既に屢述してきた通りである。即ち、永延二年書写山に登つた時、

三千界裏頭陀迹。

五十年前口誦聲。

今日幸容蒙教化。

西方定識獲相迎。

(『書写山旧記』「寂心上人讚上人詩」)

という上人聖徳の詩を賦した。<sup>(在9)</sup>また、長保四年十二月頃には和歌の贈答も行なわれている(『京都御所東山御文庫記録』)。その他、室町時代の説話の中にも、

八徳の開山寂心上人のもとへ、釜を送らせ給ひけり。寂心釜の用なる事心のうちに籠て、更に誰にも言談し給はざるに、かく有を、人これを聞て、おとろきあへり。乙天釜をいたゞき、若丸文をもちてゆけり。性空の御書も釜も、八徳山に有といへり。

(『播州書写山縁起』、傍点引用者)

のように、性空上人が二童子をして今は出家した保胤のもとに沐浴の釜と文とを贈った話が伝えられている(註<sup>10</sup>)。これは両者の交渉を物語るとともに、性空の六根清浄の徳を称讚する説話の形態をとって、書写山と八徳山の双方に伝承されたものと推定されるのである。かくして、性空に関する説話が横川や洛中の貴紳間に伝えられる過程での保胤の存在を無視は出来ないであろう。なお、保胤の学問・経学に対する当代の世評は高かった。因みに、『江談抄』『今昔』巻十九・第三「内記慶滋保胤出家語」など、平安後期以降中世にわたって、数多くの詩文及び経学に関する説話が書き記されている。

多年仏法を修め、東山如意輪寺に住して保胤(寂心)を師と仰いだ大江定基(法名寂照)も性空と結縁している。

定基が結縁を求めて書写山に登り、窓の中を垣間見たところ、誦経している性空の口もとには花が開き中から小宝塔が出て来た、という奇瑞譚は早くから伝えられていた(註<sup>11</sup>)。この話の初めの伝承者は定基であったと想定される。また後年、定基は師の保胤寂後入宋し、飛鉢法をもって異土の衆僧を感涙させたが(『続本朝往生伝』)、その入宋に先立って性空と和歌の贈答を行なっている(『旧記』遺続集下・「諸人歌事」、『伝記遺続集』『播州書写山縁起』など)。(『旧記』の記述によると、先ず性空が、

夢ノウチニワカレテ後ハナカキヨノネフリ覺テソ又モアフヘキ

と詠み贈ったのに応じて、定基は、

ネフリ覺テ又モアフヘキカネ吏ヲ夢ノ枕ニキクソウレシキ

と返歌して、ともに再会すべきことを願っている。が、しかし、後日定基が二度と故国へはもどらず異国の地でその生涯をとしてしまったことに思いやってみると、右の和歌の贈答には何か哀愁が漂っているような気がしてならない。なお、『発心集』卷二「三河聖人寂照入唐往生事」には、横川に上って源信僧都について法を学んだことが記述されている。

保胤・源信らと同道して書写山性空上人と結縁した大江為基は、参議齊光の子息、従って定基の兄である。彼もまた書写参詣の際性空の聖徳を讀えた詩を、

秋日尋書寫山、讚性空上人德行、

久誦法花一上人、繩床紙服謝風塵、山禽林鹿多爲伴、碧玉蒼頭弃不親、觀行自應瞻佛日、慈心長令伏波旬、無量

億劫薰修力、六十九年清淨身、餅獲三枚開戸處、米逢五夕卷經辰、我今運到法緣畢、安養界中許作倫。

（『伝記遺続集』「上人淨六根并所依地事」）

と賦した。その中で、六十九才の性空が既に六根清淨の徳行の域に達していた験を特にとりあげ、敬慕と讚嘆とを送ったのである。

それではいったい、屢名前の登場してくる恵心僧都源信その人は、性空上人とどれほどの関係があったというべきだろうか。<sup>(注12)</sup>既に幾度となく引用してきた、あの永延二年の僧俗同道の書写山參詣に纏わる話の中に源信も登場する。

彼もまた、

四十年來持一乘。衣猶忍辱室慈悲。

菩提行願應清淨。世々生々爲我師。

という、性空に対する畏敬の念をこめた詩を詠んで結縁した（『伝記遺続集』『書写山旧記』『播州書写山縁起』など）。その間の事情は、後日彼らの詩に和した具平親王の詩序（前述）にも源信が性空の高行を伝聞して書写山を尋ねた旨記述されている。その他、弟子の安海と書写山を訪れ、上人から饗応をうける話や、<sup>(注13)</sup>良源のもとで性空と源信・覚運ら諸師とが「討<sub>レ</sub>習教觀<sub>二</sub>」した話<sup>(注14)</sup>も知られているが、中世において最ももてはやされたのは、ほかでもない、源信と覚運（檀那）とが性空の無智を正さんとして書写山に法問に行つて、逆に敗北し帰依するという話だった

ようである。この話は『古事談』第三・僧行「源信覚運與性空問答事」や、これに依拠した『十訓抄』第三・不可侮人偷事「源信僧都等與性空上人問答事」に収められている。(注15)そればかりか、こうした先行説話の影響を受けたのであろうか、『峯相記』も性空の結縁衆として源信・覚運の名をあげている。また、嘉慶年中(一三八七—八九)から応永八年(一四〇一)の頃成立したと見られる室町時代物語『恵心僧都絵卷』の第三段も『古事談』所収話とほぼ同じ話を収めている。(注16)いづれにせよ、中世説話文学において、性空と源信・覚運らとの聯関が注目され、しかも性空が源信・覚運に優位すると見做されていた点は、略本系『沙石集』「吉野之執行通世事」や『発心集』第五「貧男好差函一事」、『私聚百因縁集』卷八・三「僧ソツカ賀上人事」等に引かれる性空の遺言の偈、あるいは『一遍聖絵』第九に見られる一遍の書写山に対する感慨と相俟って、性空に対する人々の傾倒ぶりを示すものとして忘れてはならないであらう。

注1 『播州書写山縁起』。円教寺と道長との関係については、既に第二節の延昭に関する箇所でも若干ふれておいた。

注2 今井源衛氏『花山院の生涯』参照。本書によれば、道長と花山院との関係は青年時代以来続いており、花山院の晩年、とりわけ寛弘年代には、おのおの政治的権力の偽装、物質的援助を以って、いよいよ密接になっていったようである。

注3 『拾遺和歌集』には、  
性空上人のもとに詠みてつかはしける 雅致女式部

くらきよりくらき道にぞ入ぬべきはるかにてらせ山のはの月  
とある。

注4 岡崎知子氏は、この時式部が公任に「くらきより」「ふねよせん」などの歌を托したのではないかと推定されている(『和泉式部と性空上人——「くらきより」の歌をめぐる——』文学・語学、昭34・9)。



注5 『権記』長保四年八月十八日條に

自<sub>レ</sub>花山院有<sub>レ</sub>召、參入、有<sub>レ</sub>勅曰、書寫聖形像、令<sub>レ</sub>廣貴囿<sub>レ</sub>之、近會示<sub>レ</sub>中書大王、聊記<sub>レ</sub>事旨、可<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>之者、奉<sub>レ</sub>仰退出

とある。また九月七日條にもこの画像の記事がある。

注6

『本朝麗藻』に拠る。なお、詩は次のようなものである。

寂寥山中坐禪師。一乘蓮華能憶持。掌底鐵針出胎日。(上人出<sub>レ</sub>胎手拳。父母怪開<sub>レ</sub>之。有<sub>二</sub>鐵針<sub>一</sub>云々。)經中白米絕糧時。(事見<sub>二</sub>本詩序<sub>一</sub>)。妙文暗記眠猶誦。法力冥薰<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>衰。(上人春秋六十九。面猶有<sub>二</sub>光澤<sub>一</sub>云々。)虱去都應<sub>レ</sub>身淨潔。禽馴只爲<sub>二</sub>意慈悲<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>歡<sub>二</sub>同代聞來久<sub>一</sub>。更恨<sub>二</sub>終年面拜遲<sub>一</sub>。縱使<sub>二</sub>眼前無<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>我。猶勝<sub>二</sub>耳外不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>誰<sub>一</sub>。豈非<sub>二</sub>今世<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>君美<sub>一</sub>。便是當來讚佛詞。再<sub>二</sub>拜西方<sub>一</sub>遙寄<sub>レ</sub>語。慧光早照<sub>二</sub>我愚癡<sub>一</sub>。(引用者注。カッコ内は分注である)

注7

大曾根章介氏「具平親王考」(国語と国文学、昭33・12)参照。

注8

『本朝麗藻』卷下・仏事部。

注9

この詩は『播州書写山縁起』『天台霞標』二編卷之三にも採録されている。

注10

『峯相記』にも同話がある。なお、乙天は不動明王、若天は毘沙門天の化身だと伝えられている。

注11

『旧記』新略記、『伝記遺続集』「上人德行奇特事」。

注12

両者の交渉は「上人伝」「悉地伝」及び「法華驗記」「今昔物語」の性空関係や源信関係の説話には見当たらない。

注13

『伝記遺続集』「上人德行奇特事」参照。話の内容については前節安海の項を参照されたい。

序いでに播磨国神西郡の尼入妙に一言ふれておく。「悉地伝」中の甘不思議の記事に、性空が彼女の病悩の折り法華経を贈ったという話が見える。また、『求迎寺文書』(大日本史料・寛仁元年六月十日條)によれば、源信の靈山院釈迦講の講衆の一員として彼女の名がある。入妙については高橋貞氏前掲「恵心僧都関係の説話について」がふれておられる。

注14

『本朝高僧伝』卷四十九「播州書写山円教寺沙門性空伝」。

注15

源信が性空の無知を正そうとする話は『漢光類聚』(大日本史料・寛仁元年六月十日條所引)にも見られる。

注16

『恵心僧都絵巻』の全文ならびにその成立年代・特質等については、藤井隆氏『未刊御伽草子集と研究』を参照された

『絵巻』第三段の冒頭は、「書寫上人といふ無知なる物を、よろつつの人は貴かるに、いさ我等行て、法門を以てつめてみむ」と、性空を渴仰する世間の人々と、彼を無智と侮る源信・覚運とを対照的に認めている。結末部は、中世における「有智の道心者」の代表ともいふべき高野聖・明遍と、専修念仏の法然とのそれぞれの持言を以って結ばれている。なお、室町時代物語の分類から見れば高僧伝類に属しながら、三つの説話を寄せ集めて構成したこの物語は、いわば一代記の様相を呈する一般の高僧伝類とはおよそ掛け離れた特異な存在だといえよう。

## 五

当代の書写山・性空上人と関係を有した主なる人々は、ひとり花山院周辺の人物に限らず、後中書王具平親王を中心とする文壇の参画者、あるいは叡山横川の住僧たちであった。『朝野群載』所収「書写山上人伝」はその間の事情にふれて、「南北高僧耆徳。洛中公子王孫。賢者識者。感<sub>ニ</sub>公德<sub>一</sub>行<sub>ニ</sub>。聞<sub>ニ</sub>公異<sub>一</sub>態<sub>ニ</sub>。住々尋行。頂禮結縁」と述べている。しかも上述の如く、これらの人々は屢別の場においても相互に何らかの関係を有していたのである。故に、そうした書写山を以って一種の「仏教文化圏」及び「上人説話の伝承圏」が存在したと領解するのも強ち無稽なことではないだろう。

〔付記〕 小稿は、「中世における性空上人説話について」（中世文学・第十七号、中世文学会）「性空上人説話攷——奇瑞・奇譚を中心に——」（国語国文論集・第三号、学習院女子短期大学国語国文学会）と関聯するものである。